

『ドイツ言語地図』(DSA) の調査文

佐々木 英 樹

THE GERMAN LINGUISTIC ATLAS (DSA) AND G. WENKER'S SENTENCES

Hideki SASAKI

The purpose of the present paper is twofold. Primary is to list what is called WENKERS SÄTZE — Georg Wenker's 42, 38 and 40 sentences for the surveys for the German Linguistic Atlas. They are standard German sentences which those Germans selected for the investigation were required to translate into their own dialects. Thus they constitute the core of G. Wenker's DSA. Unfortunately, however, they are little known to dialectologists here in Japan. The publication of those sentences can contribute to the understanding of the DSA itself as well as to providing the footing for further investigation of questionnaires for linguistic atlases in general.

The reason why the DSA as well as its questionnaires is not familiar enough is that the development of the project was pretty complex. My subsidiary aim here hence is to briefly describe G. Wenker's advance from his initial dialect atlas to his posthumous work, the DSA, in order for readers to better understand the settings in which Wenker's sentences were composed.

本稿の目的

標題の『ドイツ言語地図』(以下、その地図名 Deutscher Sprachatlas の略号 DSA で呼ぶばあいがあります)とは、1926年から1956年にわたってドイツで出版された方言地図のことです(「方言地図」のことを「言語地図」と言うのは、よくあることです)。しかし、同じドイツといっても、DSA が調査対象とした地理的範囲は、現在1995年のドイツの地理的範囲とは必ずしも一致しません。

小論の目的は、DSA のための資料収集のもとになった調査文を紹介することです。その調査文とは、標準的なドイツ語で書かれた比較的短い文で、主として各地の学校の先生がインフォーマントして選ばれ、自分の生まれた土地の言葉で翻訳するように求められたものです。こうしていわゆる通信調査法で収集した資料に基づいて作成されたのが DSA です。しかしその完成までの過程はかなり複雑です。このことが、日本でも DSA については一般に正しく理解されているとは言えない原因になっています。たとえば『フランス言語地図』ALF とか、ジリエロン Jules Gilliéron などの名と較べれば、『ドイツ言語地図』DSA とか、ヴェンカー Georg Wenker などのことは、それほど理解されていないと思います。このような理由から、DSA の成立過程を簡単ながら述べておくことにしました。

ですから、DSA で使われた調査文を紹介することが、第一の目的とすれば、その資料を基に作られた DSA の簡単な歴史を述べるのが第二の目的です。第二の目的は第一の目的をよく理解していただくためのもの、ということもできます。

『ドイツ言語地図』(DSA) 小史

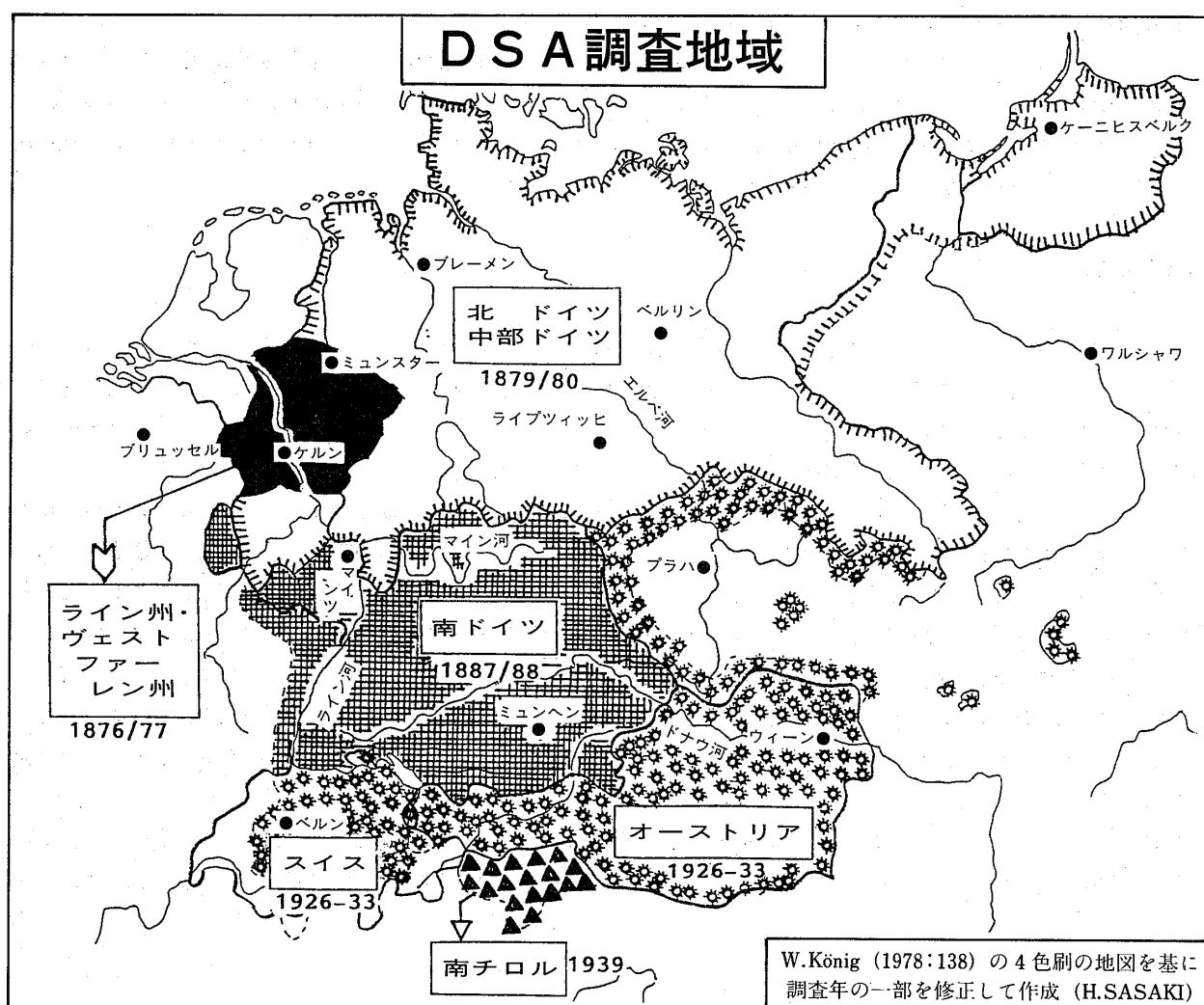
以下述べますことは、地図「DSA 調査地域」を参照しながら読んでいただきますと、地理的位置がわかりやすいかと思います。なお、地図に示されている、スイス・オーストリア・南チロル等を対象にした1926年以降の調査については、本稿では触れません。

第1次調査票 (1876-77) / 『モーゼル河以北のライン州言語地図』

『ドイツ言語地図』の基礎を築いた人はヴェンカー Georg Wenker (1852-1911) でした。デュッセルドルフで生まれたヴェンカーは、ツューリッヒ、ボン、マールブルクの各大学でドイツ語学と歴史学を学びました(1872-4)。彼の学位(博士号)論文は、『ゲルマン語における語幹末子音の変化について』Über die Verschiebung des Stammsilbenauslautes im Germanischen (1876年春) でした。

ヴェンカーは、1875年中頃からドイツ語の方言区画に関心をもっていたようでした。第1次調査票 Erster Fragebogen (42 文) をライン州北部の学校の先生宛に郵送し、自分の出身地の方言に翻訳して、返送してもらうよう依頼しました(1876年4月5日-1877年春)。

1876年から1877年冬にかけて、返送されてきた調査票に基づき、地図化の準備を始めました。そうして出来上がったのが『モーゼル河以北のライン州言語地図』Sprach-Karte der Rheinprovinz nördlich der Mosel



(1877年5月28日)です。その年1877年ヴェンカーは、マールブルク大学図書館の助手 Hilfsarbeiter としての勤務が始まりました。図書館の仕事のかたわら、地図化の作業に精をだしました。しかし、完成しないうちに、すでに、ヴェンカーは自分の頭に描いていた「きれいな方言区画」klare Dialektgrenze (Wenker 1886: 189) が地図に出てこないことに気づきました。しかし、かれは方言に対する「はっきりした方言区画」像を捨てきれず、それが地図に現れないのは、調査範囲が狭いためだと考えました。

第2次調査票 (1877) / 『モーゼル河以北のライン州およびズイーゲン郡の言語地図』

そこで、調査範囲を今までの調査地域と東北部で接しているヴェストファーレン Westfalen 州にまで拡張し、「きれいな方言区画」に期待をかけることにしました。そのために、調査費用の援助を、プロイセンの文部大臣 Kultusminister ファルク Adalbert FALK (1827-1900) に申請しました (1877年6月3日)。その主旨は、次のようなことでした——ヴェストファーレン方言の属する低地ドイツ Niederdeutsche 方言は、これまで調査対象であったライン州 Rheinprovinz 方言と同系である。しかし、ライン州方言より、低地ドイツ方言のほうが古い方言だ。その理由は、ライン河沿岸はライン河のお陰で、早くから他地域との活発な交流があった。そのため方言が混じり合っているからである。このことから、低地ドイツ方言に属し、ライン州方言と隣り合っているヴェストファーレン方言を調べれば、ライン州方言の形成過程についての情報が得られる可能性がある。こういう理由で、ヴェストファーレン方言を調査したいというのが申請の主旨でした。

上の申請とはほぼ同時に、つまり、1877年6月から同8月10日にかけて、すでに第2次調査票 (38 文) westfälischer Fragebogen をヴェストファーレンの県教育長に発送し、各学校の先生に故郷の方言で翻訳し、返送するよう依頼しました。その時、調査票・依頼状と一緒に自分の計画内容をよく理解してもらうために、Sprach-Karte der Rheinprovinz nördlich der Mosel を同封しました。その際、この地図を Das rheinische Platt (1877年) と呼んでいます。ですから、この二つの地図は名前は違いますが中身は同じものです。

その後、記入済みの調査票が返送されて来るのをまって、地図化の作業を開始しました。それが『モーゼル河以北のライン州およびズイーゲン郡の言語地図』Sprachatlas der Rheinprovinz nördlich der Mosel sowie des Kreises Siegen でした。1877年12月20日までに、すでに2枚の地図を試作していました。ヴェンカーがいかに早く結果を知りたがっていたかがわかります。しかし、ここでもまたヴェンカーの期待した「きれいな方言区画」は現れませんでした。1878年12月末に地図は完成しました (未刊) が、冷厳な事実を前にして、かれは「方言区画というものに対する考えを改めざるをえませんでした」(Wenker 1886:190) と後に述懐しています。これが、彼にとって大きな転換期になったようです。そして、「それぞれ特殊な事情をもつ個々の州といった狭い範囲に限定するのではなく、多様に交錯している方言の様相を含むもっと広い地域を観察することから、古い素朴な方言区画像に代わる新しい方言区画観が得られるに違いない」(Wenker 1886:190) と考えるにいたりました。

第3次調査票 (1879-) / 『北ドイツおよび中部ドイツ言語地図』・『ドイツ北西部言語地図』・『ドイツ帝国言語地図』・『ドイツ言語地図』

この新しい構想に従って、さらに調査対象地域の拡大を図ったヴェンカーは、1878年12月末、出来上がったばかりの『モーゼル河以北のライン州およびズイーゲン郡の言語地図』に計画書を添えて、マールブルク大学文学部 Philosophische Fakultät を通して、構想実現のための経済的援助を求める申請書を、ドイツ帝国プロイセンの文部大臣ファルクに提出しました。これに対して同文部大臣に諮問されたベルリン・アカデミー Berliner Akademie der Wissenschaften のミュレンホフ Karl Müllenhoff (1818-1884) (ゲルマン学)・キーペルト Heinrich Kiepert (1818-1899) (地理学・地図学) 教授などとの意見交換もあり、紆余曲折はあったものの、最終的にはヴェンカーも納得した修正が加えられ、申請は認められました。それをうけて、北ドイツ・中部ドイツ全域に調査票が発送されました。これが第3次調査票 (40 文) です。1879年11月以降使用された調査票は、この第3次調査票が中心になりました。なお、これを機会に、第1次調査票で調査され

たライン州北部地域は、第3次調査票であらためて調査し直されました。

1880年末までに発送された第3次調査票は約4万で、そのうち3万が回収。回収率3/4という高率です。こうして集められた資料を基に、全体のごく一部（コブレンツ、ギーセン、フランクフルト、マインツ、ダルムシュタットを含む地域）を地図化したものがヴェンカー（1881年10月）『北ドイツおよび中部ドイツ言語地図』Sprachatlas von Nord- und Mitteldeutschlandです。これは第1分冊として出版されたものですが、地図はわずか6枚です（完成の暁には468枚の地図になると見込まれていました）。しかし、これ以上地図は出版されませんでした。ヴェンカーは、これまで扱ったことがないほど大量の資料を地図化する段階で、今までの地図化の方法では無理だということに気づき、悩んだようです。なにしろマールブルク大学図書館勤務のヴェンカーは、6時間の勤務時間以外で、資料を処理しなければなりませんでしたから。ここにいたって、ヴェンカーはドイツ帝国の文部大臣に、地図化作業のための助手を採用してもらうべく要請しました。後に1884年夏 Dr. ネーレンベルク Nörrenberg が助手として採用されました。

それはよかったのですが、1882年11月16日付けで、文部大臣ゴスラー Gossler に要請されたミュレンホフ教授がキーペルト教授の協力を得て、『北ドイツおよび中部ドイツ言語地図』について厳しい批判をしました。特に、全体を13分割しているという点でした。それを受けて、これ以降、ヴェンカーはライプツィヒ Leipzig を境に東西2分割して地図化することにしました。その東側の地図を『ドイツ北東部言語地図』Sprachatlas von Nordostdeutschlandと呼び、西側の地図を『ドイツ北西部言語地図』Sprachatlas von Nordwestdeutschlandと呼びます。ただし、そこで「ドイツ北…」と言うのは、ドイツ全体を南北に二分割したばあいの、南ドイツに対立した地域を指しています。ですから、1881年に第1分冊だけ出版された『北ドイツおよび中部ドイツ言語地図』で言えば、北ドイツと中部ドイツに相当する地域を指します。紛らわしいので注意が必要です。

さてアカデミーの指示に従って『ドイツ北西部言語地図』の6枚の地図を作成し、それを添えて、アカデミーへ出版費の助成を要請しました（1885年5月16日付）。この時、南ドイツも調査対象地域に加えることを併せて要請しました（Wenker 1886:192-3）が、ともに財政難を理由に却下されました。未刊の『ドイツ北東部言語地図』の地図作成についてヴェンカーは、東側の多くが植民地化された地域のため際立った地域差は見られないという理由で別な扱いが必要だとして、最初から地図の出版は考えていなかったようです。

出版費の助成を拒否されたヴェンカーにとって、大きな転機になる出来事がありました。1885年9月30日から同10月3日にかけて第38回ドイツ語学会議 Versammlung deutscher Philologen und Schulmänner がマールブルクから南に約30km下ったギーセン Gießen で開催されました。そのおり、10月1日、ヴェンカーは自分がこれまで言語地図作成のためにおこなってきた調査について講演をしました。その中で、①言語地図に期待するものが変わって行った経過、と②ドイツの言語地図を刊行するについては、どうしても南ドイツをも入れるべきだという考え、を中心にして聴衆に訴えました。講演後、ヴェンカーとベハーゲル Otto Behagel（1854-1936）・パウル Hermann Paul（1846-1921）等との間に質疑応答があり、最後に、言語学会議として次のような決議を行ったのでした。

- 1 ヴェンカーの計画が、そのまま完全に実行されることが望ましい。
- 2 上記1を支援するべくドイツ帝国宰相官房に要請書を提出する。委細については、議長に一任。

（G. Wenker 1886:194）

その講演内容は翌年、活字になりました。そして、この決議書がほどなく大きな力を発揮します。その後つまり1886年から1888年にかけて文部大臣、アカデミー、ヴェンカー（マールブルク大学）の間で、相互の意見を交換し、調整し、決着をみました。その具体的な内容は次のとおりです。

- （1）ヴェンカーのマールブルク大学図書館における勤務を免ずる。
- （2）ヴェンカーの助手として二人（グレーデ Ferdinand Wrede とマウルマン E. Maurmann）をつける。それまでの助手と違って、国家公務員としての地位が与えられました。
- （3）財政的援助を行う。

- (4) ヴェンカーが所有するこれまでの、およびこれからの資料および言語地図はすべて国有財産とする。
- (5) 作業は計画どおり実行する。
- (6) 今後予定の言語地図はすべてが完成するまでは、いっさい公刊しない。(Goossens 1977:111)

これを受けて、宰相ビスマルクは、南ドイツの言語調査が進捗するように、バーデン、ヴュルテムベルク、バイエルン、エルザス・ロートリンゲンの各政府に、協力を依頼しています。調査票の発送は1887年から1888年にかけて行われました。この時の調査票は第3次調査票(40文)に語句を加えたものが使われたようです。こうして集めた資料を地図化したのが『ドイツ帝国言語地図』 Sprachatlas des Deutschen Reiches (1923) でした。けっきょく、1876—1895年の間に収集した資料の地点数は、48,500にまで達しました(Niebaum 1983:32)。ヴェンカーによって着手されたものですが、地図化作業の半ばで倒れ(1911年7月17日)、その後をグレーデが引き継ぎ、12年後の1923年に完成させました。この手書きの『ドイツ帝国言語地図』は二部作成されました。そして、一部はマルブルク大学、残る一部はベルリンの国立図書館に所蔵されました。地図1646枚、項目339語(Martin 1934:1)(分布が複雑なものは、地図化されなかったものがあります)。しかし、この言語地図は刊行されませんでした。そこでこの内容を研究者に知らせる手段として、マルブルク大学は『ドイツ方言地理学誌』を1908年に発刊しました。これは『ドイツ帝国言語地図』作成の状況を紹介すると同時に、グレーデ指導によるマルブルク大学学生のドイツ方言研究を載せる役割を果たしました。このようにして、『ドイツ帝国言語地図』を直接みることの出来ない方言学者の喉の渇きを多少なりとも癒したのです。

『ドイツ言語地図』は、上の『ドイツ帝国言語地図』(1923)を基にして1926年から1956年にわたって20分冊として公刊された言語地図のことです。しかし、その量は、たとえば、地図が全部で128枚というものに過ぎません。したがって、基礎になった未刊行の『ドイツ帝国言語地図』(1923)のごく一部であると言わざるをえません。しかも、その内容は、音声に関するものが圧倒的に多く、語彙そのものに関するものはごく僅かです(私が見るかぎりでは、6語)。この偏りを是正する意図があったと思われるのが、後年の『ドイツ語彙地図』 Deutscher Wortatlas (1951-1980) です。

DSAの調査文

以下には、上で触れた調査文——〔1〕第1次調査票(42文)、〔2〕第2次調査票(38文)、〔3〕第3次調査票(40文)に、日本語訳をつけて掲げます。

各ドイツ語文の後には、() 内に、他の調査文との関係を指摘しておきました。何の指摘もない場合は、他に対応する調査文がないことを意味します。そこで用いた符号は次のような意味です。

「⇒」参照。 「＝」全く同じ文。 「－」ほとんど同じ文。

「<」A<B：B文はA文を拡張したもの；「>」A>B：A文はB文を拡張したもの。

「*」大局的には大きな違いがあるものの、部分的に共通している所がある。

〔1〕－〔3〕を通して、その相互関係を見ます、と次のことが言えます。

(1) 〔1〕は孤立している率が高い。

(2) 〔2〕と〔3〕との一致率が高い。

この特徴は、ライン州北部に焦点を絞った出発点から、それが徐々にドイツ全域に目を据えていく過程を反映していると言えましょう。それは、「資料の比較性」を考えれば当然のことではあります。こう考えれば、逆に、調査文〔1〕は、ライン地方の文化と関わりのある調査文が含まれている可能性があるとも言えます。これは W. ミツカ (Mitzka 1952) が指摘していることと符合します。

〔1〕第1次調査票(42文)

42. 1 Thu Dir einen Tuch um den Kopf binden! 布を首に巻け!
42. 2 Sie hat zu mir gesagt, sie wollte heut Abend wieder nach Haus kommen. 彼女は私に、今晚帰ってきます、と言った。
42. 3 Wir sind von ihnen bestellt worden. 私たちは、彼らからよろしく言われた。
42. 4 Im Winter fliegen die Blätter durch die Luft. (42.4-381.1 = 40.1) 冬には木の葉が空中を舞う。
42. 5 Unter dem Apfelbäumchen da hinten stehen zwei Bänkchen. (42.5 < 38.26 = 40.26) 後(うしろ)にあるりんごの木の下にベンチが二つある。
42. 6 Der Schnee ist diese Nacht bei uns liegen geblieben; er liegt drei Fuß hoch. (42.6-38.25 = 40.25) 昨晩は雪が積もった。3フィートも積もっている。
42. 7 Ich hätte euch gute Liederbüchlein gegeben; ihr seid mir aber nicht artig gewesen. 私は君たちに、きれいな小さな歌の本をやろうと思っていたのになあ。でも私に意地悪したからねえ。
42. 8 Man muß ihn bedauern, er ist ein gutmüthig Schaf. 彼には同情すべきだ。善良でお人よしだから。
42. 9 Gestern war schlecht Wetter. 昨日は天気が悪かった。
- 42.10 Euer Hund hat uns das Fleisch aufgefressen. (42.10 * 38.12 = 40.19) 君たちの犬が私たちのもっていた肉を食べてしまった。
- 42.11 Habt ihr kein Stückchen Seife auf dem Tisch gefunden? (42.11 < 38.32 / 42.11 - 49.32) 君たちはテーブルの上に、石鹸を見なかったかい?
- 42.12 Ich konnte es nicht finden. 私はそれを見なかったよ。
- 42.13 Wir müssen hier noch ein Augenblickchen warten. 私たちはここでもう少し待つことにしよう。
- 42.14 Die Bauern hatten fünf Ochsen und neun Küh und zehn Schäfchen vor das Dorf gebracht. (42.14 - 38.36 = 40.37) その農民たちは、雄牛5頭、雌牛9頭、羊10頭を村まで連れてきていた。
- 42.15 Mein lieb Kind, du mußt erst noch ein bißchen wachsen und größer werden und laufen lernen. (42.15-38.16 < 40.16) おい君、もう少し成長して、大きくなったら、走れるようになるから。
- 42.16 Ich schlage dich gleich mit dem Kochlöffel um die Ohren, wenn du nicht bald gehst, du Affe! (42.16-38.11 = 40.11) すぐ行かなければ私は今、お前の(両)耳をこのスプーンで殴ってやるぞ、この猿め!
- 42.17 Unser ältester Bruder soll bei Eurem Meister in die Lehre gehen. うちの一番上の兄は、あなたの親方の所へ修行に行くことになっている。
- 42.18 Ich habe eben von ihr gehört, es wären über zwölf Häuser und eine Scheuer abgebrannt. 私はちょうど今、彼女から家が12軒以上と穀物倉庫が一軒、火事で焼かれた、と聞いたところだ。

- 42.19 Er macht heut ein wüthig Gesicht. 彼は今日は怒った顔をしている。
- 42.20 Es sind schlechte Zeiten. (42.20 = 38.19 = 40.13) いやな時代だなあ。
- 42.21 Sie hatten sich die Köpfe blutig geschlagen. 彼らはなぐりあって頭から血が出た。
- 42.22 Der ewige Regen soll die Äpfel wohl theuer machen. 長雨が続けば、りんごの値段が上がるだろう。
- 42.23 Meine Mutter hatte alte Kleider von meiner Tochter herausgelegt. 私の母は、私の娘の古い着物を出して並べさせた。
- 42.24 Ich möchte ein halb Pfund Wurst haben. (42.24 * 38.30 < 40.30) 私はソーセージを半ポンドもらいたい。
- 42.25 Was sind das für schöne Äffchen! (42.25 * 28.5 - 40.36) なんてかわいい子猿なんだろう！
- 42.26 Wollt ihr lieber ein Gläschen rothen Wein trinken oder ein Gläschen weißen? 君たちは赤葡萄酒がいいですか、それとも白葡萄酒がいいですか？
- 42.27 Der Teufel hat Pferdsfüße. 悪魔の足は馬の足だ。
- 42.28 Der Rhein ist sehr hoch gewesen. ライン河の水嵩（かさ）がうんと増していた。
- 42.29 Hättst du das gewußt! (42.29 < 38.18 = 40.18) お前がそれに気づいていたらよかったのになあ！
- 42.30 Der darf man nicht trauen, die hat es hinter den Ohren! 抜け目のないやつは、信用してはだめだ。
- 42.31 Geht, Kinder! ihr sollt unserm Knecht sagen, er sollte uns das große Buch neben den Ofen legen. (42.31 * 38.17 = 40.17) おい、子供たち、向こうに行って、うちの下男にその厚い本をストーヴのそばに置いてくれるように言ってくれ。
- 42.32 Ich bin arm und wäre gern reich. 私は貧乏だから、金持ちになりたいなあ。
- 42.33 Seid so gut und bringt mir eine Flasche frisch Wasser herauf! お前たちはいい子だから、私に新鮮な水を一瓶もってきてくれ。
- 42.34 Wir haben es ihm erzählt. (42.34 * 38.21 = 40.21) 私たちはそれを彼に話してやった。
- 42.35 So etwas thut sehr weh, das könnt ihr mir wohl glauben! (42.35 * 38.8 = 40.8) 私の言うことは本当ですよ。これは本当に痛いんですよ。
- 42.36 Er sagte ihr, er hätte das Geld selber nöthig. お金は今私も入り用だから（お貸しできない）、と彼は彼女に言った。
- 42.37 Ich will es auch nicht mehr wieder thun! (42.37 - 38.10 / 42.37 = 40.10) 私はもう二度とそんなことはしません。
- 42.38 Es kommt mir von Herzen! (42.38 - 38.34 = 40.34) それは私の真情から出たことばです。
- 42.39 Wir haben Durst gehabt wie ein Pferd! (42.39 - 38.23 = 40.23) 私たちは馬のように喉（のど）

が乾いた。

- 42.40 Deine Schwester sagte zu ihm, es säßen sechs Täubchen oben auf dem Mäuerchen. (42.40—38.35—40.36) 君の妹が、塀に鳩が6羽とまっている、と彼に言った。
- 42.41 Du da! bleib einmal stehen! wo bist du heut wieder herumgelaufen? was hast du gethan? geh nach Haus! おい君、少しはじっとしていなさい。君は今日もまたどこをうろついていたんだ。何をやっていたんだ。家へ帰れ!
- 42.42 Seine Frau hat sich gestellt, als thät sie ihn nicht kennen; sie hat ihn aber doch gekannt, und er sie auch. (42.42 * 38.20 = 40.20) 彼の奥さんは、まるで彼を知らないかのような振りをしていた。しかしもちろん、彼女は彼を知っていたし、彼は彼女を知っていたんだ。

〔2〕第2次調査票 (38 文)

- 38.1 Im Winter fliegen die trocknen Blätter durch die Luft. (⇒ 42.4) 冬には枯れ葉が空中を舞う。
- 38.2 Es hört gleich auf zu schneien, dann wird das Wetter wieder besser. (38.2 = 40.2) 雪はすぐにやんで、天気は回復します。
- 38.3 Thu Kohlen in den Ofen, daß die Milch bald an zu kochen fängt. (38) (38.3 = 40.3) ストープに石炭を入れて、ほどなくミルクが沸騰するようにしなさい。
- 38.4 Der alte Mann ist mit dem Pferde durchs Eis gebrochen und in das kalte Wasser gefallen. (38.4—40.4) そのおじいさんと馬は、氷が割れて、冷たい水の中に落ちた。
- 38.5 Er ist vor vier oder sechs Wochen gestorben. (38.5 = 40.5) 彼は4週間か6週間か前に死んだ。
- 38.6 Das Feuer war zu heiß, die Kuchen sind ja unten ganz schwarz gebrannt. (38.6—40.6) 火が熱すぎて、お菓子の下のほうが真っ黒に焼け焦げた。
- 38.7 Er ißt die Eier immer ohne Salz und Pfeffer. (38.7—40.7) 彼はいつも卵には塩も胡椒(こしょう)もかけないで食べます。
- 38.8 Die Füße thun mir weh, ich glaube, ich habe sie durchgelaufen. (⇒ 42.35) 私は足が痛い。(走り過ぎて) 足の裏が擦り切れたのだと思う。
- 38.9 Ich bin bei der Frau gewesen und habe es ihr gesagt, und sie sagte, sie wollte es auch ihrer Tochter sagen. (38.9=40.9) 私は奥さんのところに行って、そう言った。そしたら奥さんは、娘にもそう言っておきますよ、と仰(おっしゃ)った。
- 38.10 Ich will es auch nicht mehr thun! (⇒ 42.37) 私は本当にもうそんなことはしません。
- 38.11 Ich schlage dich gleich mit dem Kochlöffel um die Ohren, Du Affe! (⇒ 42.16) 大さじでお前の(両)耳をぶん殴ってやる、この猿め!
- 38.12 Wer hat mir den Korb mit Fleisch gestohlen?. (⇒ 42.10) 誰が肉のはいった私のかごを盗んだのだろう。

- 38.13 Wo gehst Du hin? sollen wir mit Dir gehen? (38.13=40.12) お前はどこに行くんだ。いっしょに行ってやろうか?
- 38.14 Mein liebes Kind, bleib hier unten stehn, die bösen Gänse beißen Dich todt. (38.14=40.14) (まだ小さな自分の娘に呼びかけて)この下にいなさい。そうしないと意地悪な鵞鳥にかみ殺されるよ。
- 38.15 Du hast heute am meisten gelernt und bist artig gewesen, Du darfst früher nach Hause gehn als die Andern. (38.15=40.15) 今日は君が一番よく勉強したし、お行儀もよかった。だれよりも早く家に帰ってよろしい。
- 38.16 Du bist noch nicht groß genug, Du mußt erst noch ein Ende wachsen und größer werden. (⇒ 42.15) 君はまだ大きくない。まずもう少し成長して、大きくならなければならない。
- 38.17 Geh, sei so gut und sag Deiner Schwester, sie sollte die Kleider für eure Mutter fertig nähen und mit der Bürste rein machen. (⇒ 42.31) いい子だから、君のお姉さんのところへ行って、君たちのお母さんの洋服を縫い上げて、ブラシできれいにしておくように言ってくれ。
- 38.18 Hättest Du ihn gekannt! dann wäre es anders gekommen, und es thäte besser um ihn stehn! (⇒ 42.29) 君が彼のことを知っていたらよかったのになあ! そうしたら事態は違って、彼には好都合だろうに。
- 38.19 Es sind schlechte Zeiten. (⇒ 42.20) いやな時代だなあ。
- 38.20 Er that so als hätten sie ihn zum dreschen bestellt; sie haben es aber selbst gethan. (⇒ 42.42) 彼はまるで、彼らが脱穀を彼に頼んでやってもらったかのような顔をしていた。本当は、彼らが自分でやったのに。
- 38.21 Wem hat er die neue Geschichte erzählt? (⇒ 42.34) 彼は誰にその新しい噂(うわさ)を話したのか?
- 38.22 Man muß laut schreien, sonst versteht er uns nicht. (38.22 =40.22) 大きな声で叫ばないと、彼は我われの言うことが分らない。
- 38.23 Wir sind müde und haben Durst. (⇒ 42.39) 我々は疲れて、喉(のど)が乾いた。
- 38.24 Als wir gestern Abend zurück kamen, da lagen die Andern schon zu Bett und waren fest am schlafen. (38.24 =40.24) 我われが昨晚帰ってきた時、家族の者はもう床に就き、ぐっすりと寝ていた。
- 38.25 Der Schnee ist diese Nacht bei uns liegen geblieben, aber heut Morgen ist er geschmolzen. (⇒ 42.6) 我々の所では、昨晚雪が積もった。しかし、今朝には溶けていた。
- 38.26 Hinter unserm Hause stehen drei schöne Apfelbäumchen mit rothen Äpfelchen. (38) (⇒ 42.5) わが家(や)の裏には、三本の美しいりんごの木に赤い小なりんごがなっている。
- 38.27 Könnt ihr nicht noch ein Augenblickchen auf uns warten, dann gehn wir mit euch. (38.27 =40.27) もうちょっと待ってくださいませんか。そしたら君たちと一緒に行きましょう。

- 38.28 Unsere Berge sind nicht sehr hoch, die euern sind viel höher. (38.28=40.29) 我われの山はそんなに高くない。君たちの山のほうがずっと高い。
- 38.29 Ihr dürft nicht solche Kindereien treiben! (38.29=40.28) 君たちは、そんな子供みtainなことをしてはいけません。
- 38.30 Wieviel Pfund Wurst wollt ihr haben? (⇒ 42.24) 君たちはソーセージを何ポンド欲しいのですか？
- 38.31 Ich verstehe euch nicht, ihr müßt ein bischen lauter sprechen. (38.31=40.31) 私は君たちの言うことが分からない。もう少し大きな声で言ってくれなきゃ。
- 38.32 Habt ihr kein Stückchen Seife für mich auf meinem Tische gefunden? (⇒ 42.11) 君たちはばくの机の上に小さな石鹸を見なかったかい？
- 38.33 Sein Bruder will sich zwei schöne neue Häuser in eurem Garten bauen. (38.33=40.33) 彼のお兄さんは、君たちの庭に新しいきれいな家を二軒建てようとしている。
- 38.34 Das Wort kam ihm von Herzen! (⇒ 42.38) 彼の言葉は心の底から出たものだ。
- 38.35 Was sind das für Vögel da oben auf dem Mäuerchen? (⇒ 42.25 / 42.40) 小さな塀にどんな小鳥が止まっていますか？
- 38.36 Die Bauern hatten fünf Ochsen und neun Kühe und zwölf Schäfchen vor das Dorf gebracht, die wollten sie verkaufen. (⇒ 42.14) その農夫たちは、雄牛5頭、雌牛9頭、子羊12頭を売りたいと思って、村の近くまで連れてきていた。
- 38.37 Die Leute sind heute alle draußen auf dem Felde und mähen. (38.37=40.38) 今日はみんな畑に出て、麦刈りをしている。
- 38.38 Das war recht von ihnen! (38.38=40.35) 彼らはよくやってくれた。

〔3〕第3次調査票(40 文)

- 40.1 Im Winter fliegen die trocknen Blätter durch die Luft herum. (⇒ 42.4) 冬には枯れ葉が舞い散る。
[1887年以降、下線部 durch die(Luft…)を in der (Luft…)に変更]
- 40.2 Es hört gleich auf zu schneien, dann wird das Wetter wieder besser. (⇒ 38.2) 雪はすぐにやんで、天気は回復します。
- 40.3 Thu Kohlen in den Ofen, daß die Milch bald an zu kochen fängt. (⇒ 38.3) ストーヴに石炭を入れて、ほどなくミルクが沸騰するようにしなさい。
- 40.4 Der gute alte Mann ist mit dem Pferde durch's Eis gebrochen und in das kalte Wasser gefallen. (⇒ 38.4) あの、人のいいおじいさんと馬は、氷が割れて、冷たい水の中に落ちた。
- 40.5 Er ist vor vier oder sechs Wochen gestorben. (⇒ 38.5) 彼は4週間か6週間か前に死んだ。

40. 6 Das Feuer war zu heiß, die Kuchen sind ja unten ganz schwarz gebrannt. (⇒ 38.6) 火が強すぎて、お菓子の下のほうが真っ黒に焼け焦げたよ。
[1887年以降、下線部(Das Feuer war zu)heiß、を(Das Feuer war zu) stark、に変更]
40. 7 Er ißt die Eier immer ohne Salz und Pfeffer. (⇒ 38.7) 彼はいつも卵には塩も胡椒(こしょう)もかけないで食べます。
40. 8 Die Füße thun mir sehr weh, ich glaube, ich habe sie durchgelaufen. (⇒ 38.8) 私は(両)足がとても痛い。(走り過ぎて)足の裏が擦り切れたのだと思う。
40. 9 Ich bin bei der Frau gewesen und habe es ihr gesagt, und sie sagte, sie wollte es auch ihrer Tochter sagen. (⇒ 38.9) 私は奥さんのところに行って、そう言った。そしたら奥さんは、娘にもそう言っておきますよ、と言った。
- 40.10 Ich will es auch nicht mehr wieder thun. (⇒ 42.37) 私はもう二度とそんなことはしません。
- 40.11 Ich schlage Dich gleich mit dem Kochlöffel um die Ohren, Du Affe! (⇒ 42.16) 大さじでお前の(両)耳をぶん殴ってやる、この馬鹿野郎!
- 40.12 Wo gehst Du hin, sollen wir mit Dir gehn? (⇒ 38.13) お前はどこに行くんだ? いっしょに行ってやろうか?
- 40.13 Es sind schlechte Zeiten! (⇒ 42.20) いやな時代だなあ。
- 40.14 Mein liebes Kind, bleib hier unten stehn, die bösen Gänse beißen Dich todt. (⇒ 38.14) (まだ小さな自分の娘に呼びかけて)この下にいなさい。そうしないと意地悪な鶯鳥にかみ殺されるよ。
- 40.15 Du hast heute am meisten gelernt und bist artig gewesen, Du darfst früher nach Hause gehn als die Andern. (⇒ 38.15) 今日は君が一ばんよく勉強したし、お行儀もよかった。だれよりも早く家に帰ってよろしい。
- 40.16 Du bist noch nicht groß genug, um eine Flasche Wein auszutrinken, Du mußt erst noch ein Ende wachsen und größer werden. (⇒ 42.15) 君はまだワインを一本飲み干す年ではない。もうすこし大きくなるといけない。
[1887年以降、下線部 ein Ende を etwas に変更]
- 40.17 Geh, sei so gut und sag Deiner Schwester, sie sollte die Kleider für eure Mutter fertig nähen und mit der Bürste rein machen. (⇒ 42.31) いい子だから君のお姉さんのところへ行って、君たちのお母さんの洋服を縫いあげ、ブラシできれいにしておくよう言ってくれ。
- 40.18 Hättest Du ihn gekannt! dann wäre es anders gekommen, und es thäte besser um ihn stehn. (⇒ 42.29) 君が彼のことを知っていたらよかったのになあ! そうしたら、事態は変って、彼には好都合だろうに。
- 40.19 Wer hat mir meinen Korb mit Fleisch gestohlen? (⇒ 42.10) 誰が肉のはいった私のかごを盗んだのだろう。
- 40.20 Er that so, als hätten sie ihn zum dreschen bestellt; sie haben es aber selbst gethan. (⇒ 42.42) 彼はまるで、彼らが脱穀を彼に頼んでやってもらったかのような顔をしていた。本当は、彼らが自分

でやったのに。

- 40.21 Wem hat er die neue Geschichte erzählt. (⇒ 42.34) 彼は誰にその新しい噂を話したのか。
- 40.22 Man muß laut schreien, sonst versteht er uns nicht. (⇒ 38.22) 大きな声で叫ばないと、彼は我われの言うことが分からない。
- 40.23 Wir sind müde und haben Durst. (⇒ 42.39) 我われは疲れて、のどが乾いた。
- 40.24 Als wir gestern Abend zurück kamen, da lagen die Andern schon zu Bett und waren fest am schlafen. (⇒ 38.24) 我われが昨晚帰ってきた時、家族の者はもう床に就き、ぐっすりと寝ていた。
- 40.25 Der Schnee ist diese Nacht bei uns liegen geblieben, aber heute Morgen ist er geschmolzen. (⇒ 42.6) 我われのところでは、昨晚雪が積もった。しかし、今朝には溶けていた。
- 40.26 Hinter unserm Hause stehen drei schöne Apfelbäumchen mit rothen Aepfelchen. (⇒ 42.5) わが家の裏の三本の美しいりんごの木には赤い小きなりんごがなっている。
- 40.27 Könnt ihr nicht noch ein Augenblickchen auf uns warten, dann gehn wir mit euch. (⇒ 38.27) もうちょっと待ってくれませんか。そしたら君たちといっしょに行きましょう。
- 40.28 Ihr dürft nicht solche Kindereien treiben. (⇒ 38.29) 君たちは、そんな子どもみたいなことをしてはいけません。
- 40.29 Unsere Berge sind nicht sehr hoch, die euren sind viel höher. (⇒ 38.28) 我われの山はそんなに高くない。君たちの山のほうがずっと高い。
- 40.30 Wieviel Pfund Wurst und wieviel Brod wollt ihr haben? (⇒ 42.24) 君たちはソーセージを何ポンド、パンを何個ほしいのですか。
- 40.31 Ich verstehe euch nicht, ihr müßt ein bißchen lauter sprechen. (⇒ 38.31) わたしは君たちの言うことが分からない。もう少し大きな声で言ってくれなきゃ。
- 40.32 Habt ihr kein Stückchen weiße Seife für mich auf meinem Tische gefunden? (⇒ 42.11) 君たちは、ぼくの机の上に、白い小さな石鹸を見なかったかい？
- 40.33 Sein Bruder will sich zwei schöne neue Häuser in eurem Garten bauen. (⇒ 38.33) 彼のお兄さんは、君たちの庭に新しいきれいな家を二軒建てようとしている。
- 40.34 Das Wort kam ihm vom Herzen! (⇒ 42.38) 彼の言葉は心の底から出たものだ。
- 40.35 Das war recht von ihnen! (⇒ 38.38) 彼らはよくやってくれた。
- 40.36 Was sitzen da für Vögelchen oben auf dem Mäuerchen? (⇒ 42.25 / 42.40) どんな小鳥【複数】が塀（へい）にとまっていますか？
- 40.37 Die Bauern hatten fünf Ochsen und neun Kühe und zwölf Schäfchen vor das Dorf gebracht, die wollten sie verkaufen. (⇒ 42.14) 農夫たちは、雄牛5頭、雌牛9頭、子羊12頭を売りたいと思って、村の近くまで連れて来ていた。
- 40.38 Die Leute sind heute alle draußen auf dem Felde und mähen. (⇒ 38.37) 今日はみんな畑に出て、

麦刈りをしている。

40.39 Geh nur, der braune Hund thut Dir nichts. 行ってごらん。あの茶色い犬は何もしないよ。

40.40 Ich bin mit den Leuten da hinten über die Wiese ins Korn gefahren. わたしは馬車で仲間といっしょに草原を越え、麦畑の中に突っ込んだ。

参考文献

この小論では、主として下記の文献に基づいて、歴史を再構しました。その中でも、ヴェンカー自身が述べているものは、自らのことを自らが述べているものですから、第1次文献資料といっていい。たとえば、ヴェンカーの言語地図作成の目的について、従来から言われてきた(日本の方言学界だけではなく)「“音法則に例外なし”を検証するため」とする説には、修正を施す必要のあることがこの文献から明らかです。この文献は、1885年に行ったヴェンカーの講演を筆記したものです。

WENKER, Georg (1886) (Vortrag über das Sprachatlasunternehmen) in: Verhandlungen der 38. Versammlung deutscher Philologen und Schulmänner in Gießen vom 30. September bis 3. Oktober 1885. Leipzig. S.187-194.

次は、第2次文献資料といってもいい文献です。これは、マールブルク大学に保管されている、DSAの方言生(なま)資料だけではなく、ヴェンカーが提出した申請書類、調査票に付して出した記入上の注意を含む依頼書など豊富な文献資料をフルに活用してできた論文で、その迫力は群を抜いています。もちろん現代からの解釈には、異なる意見もあり得るものですが、随所に示されている原資料からの引用は貴重です。

KNOOP, Ulrich, Wolfgang PUTSCHKE & Herbert Ernst WIEGAND (1982) Die Marburger Schule: Entstehung und frühe Entwicklung der Dialektgeographie. In: Dialektologie. Ein Handbuch zur deutschen und allgemeinen Dialektforschung (Erster Halbband). Hg. von Werner BESCH, Ulrich KNOOP, Wolfgang PUTSCHKE & Herbert Ernst WIEGAND. Berlin & New York. S. 38-92.

上の第1次、第2次文献資料に続く第3次文献資料として、ヴェンカーの仕事を実際に引き継いだ言語地理学者の手によるものです。しかし、最初からヴェンカーと一緒に仕事をしたという人はいませんから、資料としては「第3次」と判断しました。

MARTIN, Bernhard (1959) Die deutschen Mundarten (zweite, neubearbeitete Auflage), Marburg: N. G. Elwert Verlag.

MITZKA, Walther (1952) Handbuch zum Deutschen Sprachatlas, Marburg: Elwertsche Universitätsbuchhandlung.

上に挙げた文献資料に基づいていると判断できる論考であるところから、第4次文献資料として下記にあげます。但し、記述に問題があるという意味ではありません。事実、BARBOUR 他('90)、NIEBAUM('83)は、上の第2次文献資料に沿ったものですし、GOOSSENS('77)は要領よくまとめられたものです。

BARBOUR, Stephen & Patrick STEVENSON (1990) Variation in German / A critical approach to German sociolinguistics, Cambridge University Press.

GOOSSENS, Jan (1977) Deutsche Dialektologie (Sammlung Götschen 2205), Walter de Gruyter & Co.

NIEBAUM, Hermann (1983) Dialektologie (Germanistische Arbeitshefte 26), Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

最後に、事典と言語地図で利用したものを挙げておきます。

ERICH, Oswald A. & Richard BEITL (hrsg) (1955) Wörterbuch der Deutschen Volkskunde, Stuttgart: Alfred Kröner Verlag.

KÖNIG, Werner (1978) dtv-Atlas zur deutschen Sprache. München: Deutscher Taschenbuch Verlag GmbH & Co. KG.

なお本文で示した「調査文」(生まれた土地の言葉で翻訳してもらった標準語文)は下記の論文から引用しました。第1・2次調査票については：

MARTIN, Bernhard (1934) Georg Wenkers Kampf um seinen Sprachatlas (1875-1889) in: Von Wenker zu Wrede (Festschrift F. Wrede). DDG 21, S.1-37. の内 S. 5-8

* DDG = Deutsche Dialektgeographie. Marburg 1908-

第3次調査票については：(MITZKA 1952 : 13-4)。

謝 辞

本文で挙げました調査文の邦訳については、グロータース W. A. GROOTAERS 先生にお目通しをいただき、貴重なご意見を賜り、その線にそって修正した箇所が多々あります。厚くお礼を申しあげます。先生が言語地理学という学問の理念を、実際のフィールド・ワークをとおして日本に紹介され、若い学者に大きな影響を与えられてきたことは徳川宗賢 (1981) 『言葉・西と東』(中央公論社、167-8) などにも述べられているとおりです。先生のお父さま L. GROOTAERS は、生前ベルギーのルーヴェン大学教授として、音声学・言語地理学を講じていらっしゃいました。そして、学生時代 (1908年ころ) から G. ヴェンカーのドイツ方言調査に触発され、ベルギー・オランダ語地域について方言調査を行い、立派な業績を残されました。ヴェンカーの調査文のオランダ語訳もご自分の手によるものがあります。そういうこともあり、ご子息のグロータース先生が私の訳文をご覧になったときは、お父さまのことを想いおこされたのか、ことのほか関心を示されました。

もちろんのことですが、この小論に対する責任はすべて私にあります。思い違い、読み違い、考え違い、等々が含まれていることを心配しています。ご指摘、ご教導を請い願うしだいでございます。